

第1節 学会誌の変遷

日本鳥学会誌の変遷

鶴見みや古（山階鳥類研究所自然誌研究室）

はじめに

日本鳥学会が創立されたのは1912年（明治45年）であるが、学会誌が創刊されたのは3年後の1915年（大正4年）である。黒田長久（1962）は、学会創立50周年記念誌のなかで「日本鳥学の黎明は明治の終わりであったから、他の科学部門と同じく欧米鳥学が日本に入りはじめ、本草研究から近代研究に切りかえられた。当時の鳥学は種類の解明という基礎的分類学の段階にあったから、日本鳥類の分類、分布の研究から着手され、着々と成果が上げられ欧米と肩を並べるようになり、「鳥」も世界5大誌に数えられた^{注)}。」と記している。また、日本鳥学会創設者の一人、黒田長禮（1962）も学会創立50周年を記念する文章の中で、「日本の鳥の研究も過去50年の間には全く驚くほどの進歩発達を遂げたといえる。はじめわれわれがやりだした頃は鳥のことなど一般の人々は全く何も知らず、知ろうともせず、なんだ鳥の研究と一口に蔑まれてしまっていた。それが段々にわれわれのもつ鳥の知識をたよっているいろいろの話（たとえば渡り鳥の話、食物に関する話、地方的鳥の種類のことなど）を聞きにきたり、また書かされたりするようになった（後略）」と鳥学会創設時か

らの50年を振り返って記している。ここに至るまでには太平洋戦争の影響による約3年間の休刊という会にとっての一大事もあった。学会誌は時代に応じて誌名、発行回数、発行スタイルの変更をしつつも、文字を媒体とした研究発表の場、学会員の交流の場として今日まで営々として発行されてきた。2012年、学会発足100年を迎えるにあたり、いわば学会の顔ともいえる学会誌がどのように誕生し、100年の歴史の中でどのように変わってきたのか、ここでは学会の歴史を四つの時期に分け、日本鳥学の発達を、学会誌の掲載内容と体裁に視点をおいてここに振り返る。

注)

世界5大誌が何であるかの記述はこの文献に記していない。しかし、他の文献のなかで、3大誌として、*Journal für Ornithologie*, *Ibis*, *Auk* を挙げている（黒田1958）。

参考文献

- 黒田長久（1958）鳥類雑誌便覧。読書春秋9(3): 14-16, 29.
 黒田長久（1962）日本鳥学将来の希望。鳥17(79/80): 37-40.
 黒田長禮（1962）創立50周年を迎えた日本鳥学会。動物系統分類学月報4: 1-2.

学会誌発行の経緯

鶴見みや古（山階鳥類研究所自然誌研究室）・中村 司（山梨大学名誉教授）

日本鳥学会は、1912年（明治45年）東京帝国大学教授飯島魁、内田清之助、黒田長禮らによって創立されたが、学会誌「鳥」（*Tori*）が創刊されたのは3年後の1915年（大正4年）である。なぜ、会誌発行を3年間行わなかったかについての理由を記したものを見つけることはできなかったが、黒田長禮は、学会創立50周年記念誌（1962年）および「鳥」100号（1976年）のなかで、「飯島会頭はすこぶる磊落で当意即妙に富んだ方であったが、細心の注意を忘れない方であったから、

たとえ会はできても会合、会食、雑談または講演程度で、互いに鳥談を交えて知識を交換し、時に会誌を出す話があっても会頭はなかなかこれを許されなかった。それゆえようやく機が熟して会誌が出たのは大正4年（1915）のことであった。そしてその会誌の名は会頭自らの発意で、簡単明瞭な「鳥」が選ばれたのであった。」と記している。また、飯島（1915）は「鳥」第1巻第1号の冒頭、「本邦鳥類ノ研究ニ就キテ」のなかで、発刊の意義について、「今までのところ、日本の鳥類の研究は